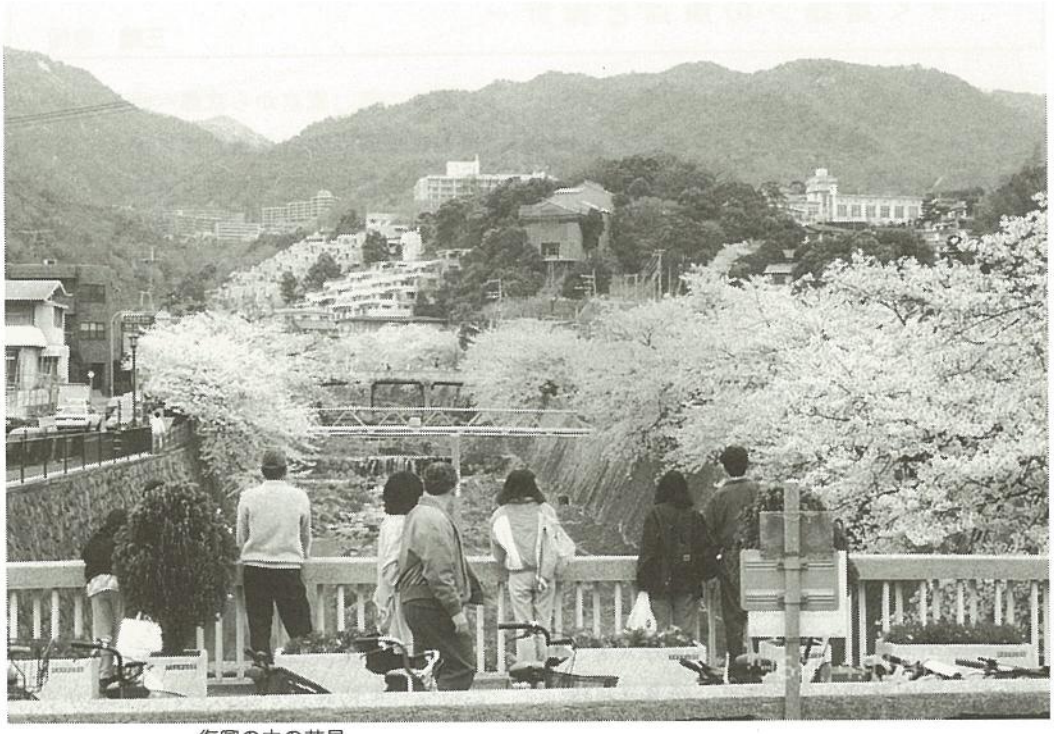
ISSN 0918-1954

アルパック ニュースレター



復興の中の花見
復旧工事中のライト邸（重要文化財）と川に居着いたイノシシを望む（阪急芦屋川駅より）

アルパック　ニュースレター　もくじ　1996年5月1日

- アルパック・ベンチャーの道程と展望 …… 2
- 脱近代のまちづくりとしての住民主体型まちづくり考 …… 4
- 市民による井戸端公園づくり …… 5
- ケニア便り　その2 …… 7
- 但東町シルク温泉に身障者用浴室ができました …… 9
- 4年生が学ぶ「働くおじさん」です …… 10
- 情報化へ向けて－名古屋事務所での取組みをもとに …… 11
- インターネットに触れてみよう …… 12
- '96年新人紹介 …… 13
- 新刊旧刊書評紹介 …… 15
- まちかど …… 16

NO. 77

アルパック創立30周年へ

アルパック・ベンチャーの道程と展望

―＜業務＞の原点と指針―

三輪　泰司

アルパック・ベンチャーの業務の原点は３つ。その１、シンクタンク・コンサルタントなる職能への挑戦、その２、「総合家-Generalist」なる専門家集団を目指すこと、その３、その為に地域に密着しつつ最先端の計画技術を追求することです。

それを＜業務＞にするには、確信を得る必要があります。人並みに努力はしました。

ベンチャーへの原体験と研究

万国博の会場計画から起こったと申しましたように、それはまさに Generalな経験でした。そもそも「万博とは何か」から始まり、基本理念―「人類の進歩と調和」というご本尊・ご神体があって、半年間に4000万人をどう捌くか、周辺地域への影響は、事業採算は、そして千里丘陵の地形・地質、造成と空間造形等々、様々な専門家の智恵を結集し、形にまとめ上げて行かねばなりません。

「アジア太平洋シンクタンク会議 '95」で、シンクタンク生成と概念を提起する機会を得たことはありがたいことでした。我が国にも近代シンクタンクは戦前からありました。満鉄調査部・理化学研究所・労働科学研究所・東京市政調査会の４機関を紹介しました。また、総合計画等に関する文献や情報は、戦前から大学等には沢山入っていました。今世紀初頭の Ebenezer HowardのGarden Cities of Tomorrow ―所謂「田園都市論」をはじめ、「近隣住区論」で知られるNew York都市圏研究とその背景、ＣＩＡＭ（近代建築家連盟）の諸宣言。総合開発では、ＴＶＡ(Tennessee Valley Authority) から旧ソ連の大自然改造計画まで。

創業の前、東京から京都へ帰る道中（？）日本建築学会の派遣調査団に加えて頂いて、内田祥哉先生や田村　明先生等とシベリアからヨーロッパを２ケ月近く回り道をしてきました。主目的はソ連・東欧。団は東ベルリンで解散。出来たばかりの「ベルリンの壁」を越えて西側へ。１＄＝ 360円の時代でした。家族には惨憺たる目にあわせましたが、30歳代ばかりの貧乏旅行でした。体力はあるので、パリでは初動期のラ・デファンス、ギリシャではドキシアデス・アソシエィツ等々、精力的に訪問し、聞きまくりました。

シンクタンク業務の特性

今でも、我が国の学界ではGeneralistなどという「専門家」が認められているかどうか疑問ですが、地域の計画は単なる技術的・造形的問題ではなく、社会的・経済的問題であり、政治的・行政的過程でもあることは紛れもない現実です。また、シンクタンク・コンサルタントの区別や職能の定義・業務規定はありませんが、総合研究開発機構（ＮＩＲＡ）の要覧から借りて規定しますと、①現代社会の抱えている問題を対象とし、②学際的・総合的組織と方法をもって研究し、③具体的解決策と代替を提案する職能ないし機関、ということができます。勿論、シンクタンク自身も調査・研究によって知見を得、理論を開発することもありますが、本来は専門的知識の総合化が使命です。

1965年に広域市町村圏が位置付けられた後、1969年に地方自治法改正で「総合計画・基本構想」の策定が義務付けられ、近畿圏を中心に「総合計画」がアルパックの基幹的業務に

確立してきました。市場が成長すると“参入”も始まります。高度経済成長の1970年代は、シンクタンク設立ブームの時代です。

理念・方法を業務に貫き、特徴を発揮しなければなりません。①どのような姿勢・視点で総合化するか②代替の提示も重要で、時には現行の政策や施策の評価・批判も使命です。この２点に個人と機関の特徴が現れます。

暮らしの実感と先端性

総合計画とはデカイ話しばかりではありません。既成概念を破る独創的な着想や最先端技術も、足元の地味で小さなこと、生活の実感から生まれるものだと思います。それは、「現地主義」の方法で活きてきます。

幼児施設は担当者の“体験入園”から始めました。帰ってきて「疲れました」何でや？「音です」よし測ってみよう。60～80ホンもの高い幼児の声を上手く吸音すべきだ。保育園は保母の働きの場でもあります。病院は医療従事者の仕事場です。看護婦さんの動きに無駄があり過ぎるのではないか、エアコンの風がおかしいぞ、院内感染の防止も設計の責任だぞ。専門メーカーと協同して病院建築に関する技術開発も進めました。シンクタンク等とリンクしているアルパックの建築・ランドスケープ設計は、技術・造形のプロトタイプの提案に、その存在意義があります。

未来学がもてはやされ、シュミレーションといった手法も発達しました。私自身は、1962年の技術士試験までは、工業団地や住宅団地の計画に、オペレーションズ・リサーチの手法を使っていましたが、戦後間もない頃、科学雑誌で知ったやはりアメリカ生まれの総合的な新しいモデル“サイバネテックス”が、宇宙開発などに応用されていることを見て、我々の基幹技術－「計画技術」にも使えるのではないかと考えました。通信と制御は実際に、コミュニケーション・モデルとして社会・政治システム研究に発展していまして関西学研都市構想に応用しました。

しかし本当に、アルパックの業務を特徴付けている方法論の原点は何かと言われれば、関西学研都市を構想された奥田　東先生等の動機を尋られた時にも申しましたが、それは“愛”であり情熱だとしか言えません。家族を愛し、郷土を愛することは、人類を愛し・祖先を敬い、自然を慈しむ心に通じます。人間性などは強大な力の前では如何にも弱いようですが、歴史が証明しているように、最も強い力だと思っています。

“のれん”の精神

アルパックも規模が大きくなり、専門分野の奥行きも深くなってきますと、新たな展開が出来てきました。“テーマ方式”といった学際的研究を組織する仕組みもそうです。

地域事務所や専門的計画部がリードしているＮＰＯ研究や環境問題・省資源・省エネルギー・防災安全の研究等々です。同時に“原点”を明文化しておく必要も出てきました。

この種の業務と、従って職能には、常に２つの危険があると思います。ただの作業屋になること、ただの情報屋になることです。また、我が国では伝統的に、知的労働に対する評価が低いのは困ったことです。しかし、正当な社会的評価を得るには、シンクタンク・コンサルタント・設計事務所の側にも、職能倫理を保持し、職業の品位を高める自主・自律の努力が要求されます。奉仕の精神こそが業務の可能性を真に持続可能にする源泉です。

我が国にも伝統的な“のれん”の精神があります。創業時の就業規定前文を独立して、1990年に制定した「倫理規定」は私達の最高規範です。

（代表取締役会長　みわ　ひろし）

時代を読む〔30周年記念寄稿〕

脱近代のまちづくりとしての住民主体型まちづくり考

久　隆浩

世界情勢に目をやればベルリンの壁の崩壊に象徴される東西冷戦構造の終結とそれにともなう民族紛争の激化、国内情勢では自民党支配のいわゆる55年体制からの転換、等々世の中はまさに激動の時代である。こうした時代の流れは、多くの論者が指摘しているように「近代」の相克、すなわち脱・近代化の動きとして捉えられる。こうした脱近代化は、まちづくりの動向にどのように影響し、また、今後どのような方向に向かうのか、について私論を展開してみたい。

近代化の意味するもの

近代とはどのような時代であったのか。伊藤守氏の言葉を借りて、情報コミュニケーション論の側面から近代を捉えなおしてみると次のように考えられる。近代においてわれわれは、「自然を認知的・道具的な観点から客観的な対象として捉えることで＜技術的合理性＞の支配下に従属させ、さらに、人間を行為の主体とみなす一方で自然と同様に人間も操作の対象とみなす社会空間を組織した。そのことによって、生産力を大幅に拡大し、効率的で生産性の高い機能的な社会システムを作り上げてきたのである。」しかし、それは「人間と自然、人間と人間との間の＜コミュニケーション的＞側面を抑圧し、行為と情報の一方向性を前提して初めて組織されたものである。」（『情報社会とコミュニケーション』）

近代化によってわたしたちに与えられた恩恵も多大である一方で、そのツケも少なくない。その代表例が環境破壊であろう。人間から自然への一方的な働きかけによって、いかに多くの自然環境が危機に瀕しているかは周知の事実である。また、学校における「教える者と教えられる者」の関係、さらに病院における「治療者と患者」といった関係がさまざまな問題を生みだしている。これからの社会のありようは、我々がなじんでしまった「近代」の構造をいかに取り扱っていくかにかかっている。

近代からの転換と住民主体型まちづくり

伊藤氏は、この点に関して次のように指摘する。「現在の社会の基本的な部分は、法であれ、規則であれ、貨幣であれ、われわれ一人一人が個性ある主体として相互に干渉し合う苦悩とリスクを軽減するさまざまな制度的媒体によって制御されている。しかし、現代は、もはやそうした制度に依拠して効率的に物事を押し進めることを許さない。一人ひとりがリスクを背負い、苦悩に耐えながら、自己と同様に個性ある他者とコミュニケーションすることが求められる時代なのである。」こうした動きは従来のシステムからくらべるとたしかに手間ひまがかかり大変なことである。しかしながら、「制度や機構に寄り掛からず、コミュニケーションを通じて関係をつくりかえていくこと、その危険性を回避せず、拒否せず、＜近代＞を組み替えていく」ことができるか否かが、いま問われている。

こうした情勢をまちづくりの分野にあてはめてみると、まさに＜住民主体のまちづくり＞の姿が浮かんでくる。行政からの一方向的な計画情報の伝達ではなく、住民同士が時間をかけて議論をしあい、まちのあるべき姿を構想し、まちづくりをおこなっていく。これ

こそが脱近代のまちづくり手法なのである。近年、各地で住民主体のまちづくりが展開されているのは、じつは脱近代化といった時代背景が要請したものといえる。都市計画やまちづくりに要求される<公共性>も議論のなかから生まれてくる。J．ハーバーマスがB．マーニンの言葉を借りて言うように「正統性の源泉は、個人のあらかじめ決定されている意思ではなく、その意思が形成される過程それ自体、いいかえれば協議である。正統な決定とは、万人の意思を代表するものではなく、万人の協議の成果である。そうした成果に正統性をあたえるのは、万人の意思が形成される過程である。協議の原理は個人主義的であるとともに民主主義的でもある。われわれは、たとえ長きにわたる伝統に反する危険をおかすことになっても、正統的な法は、普遍的な協議の成果であって、一般意思の表明ではないことを確認しておかなければならない。」（『公共性の構造転換』）

これからのまちづくりに期待すること

阪神大震災後のまちづくりにおいても、住民主体のまちづくりが叫ばれてはいるが、なかなかうまくいかない。それは、近代と脱近代の相克の構図として捉えられよう。時代の転換期に起こったからこそ、旧来のシステムと時代の要求とが齟齬をきたしている。こうした状況をいかに克服できるのか、まちづくりの専門家に問われている大きな課題である。

私自身も住民主体のまちづくりを微力ながら支援しているが、そうした動きの中でもアルパックの方々との協働の場面も少なくない。住民主体型まちづくりを研究・実践しているメンバーを集めての「コミュニテイ・プランニング研究会」の主宰やまちづくりの新たな動きを情報交換する「関西まちづくりフォーラム」の開催を積極的におこなうことによって、脱近代のまちづくりに一石を投じようと試みているアルパックとともに、私もがんばっていきたいと思う。生活者の視点を大切にし、つねに新しい動きにチャレンジするアルパックの姿勢を今後も大切にして欲しいと願っている。

（大阪大学工学部環境工学科助手
ひさ　たかひろ）

市民による井戸端公園づくり

原田　弘之

今年のニュースレターの正月号で「英国グラウンドワーク活動」について報告しましたが，ある意味でそれに似た活動ともいえる「市民による井戸端公園づくり」に参加してきました。

前日の雪も解けて２月18日は風が冷たいものの快晴となりました。ここは芦屋市の三八通商店街の一角。とはいっても震災でこの辺りの商店街はほとんどつぶれてしまい、現在は更地が広がっています。震災復興の土地区画整理事業の区域でもあります。こんな中に公園づくりの舞台となった「白水皇白砂（はくすいこうはくさ）の井戸」があります。この井戸は時計屋さんの持ち物ですが、震災前から一般の人々に開放し、おいしい水ということで四六時中市民がポリタンクをもって水を汲みに来る光景が見られました。残念ながら震災時には建物が倒壊して井戸は使えませんでした。

今回は震災のモニュメントとして、これからのまちの小さな防災基地、コミュニティ拠

点として、井戸を活用した公園をつくろうということです。公園といっても、行政が都市計画的に設置する「都市公園」ではなく、土地も民有地で予算もゼロです。したがってこれからの区画整理事業の動向によってどうなるかわからないという、ある種ゲリラ的な公園づくりです。主催は主婦を中心としたまちづくりの勉強会「芦屋市民街づくり連絡会」で、これまで何回かのワークショップによって敷地の測定や計画づくり、模型づくりが行われてきました。

約33㎡の敷地に井戸と井戸水を利用した池（メダカを飼う予定）、花壇、掲示板（コミュニティボード）、中低木の植栽などが計画されています。井戸は誰でも使えるように蛇口式にし、水道の下の水場には、玄関のアプローチに使われていた敷石（約 100×50cm）を２枚並べて置き、井戸らしい雰囲気づくりをしました。もともとこれは阪神国道電車（現在の国道２号線）の敷石の廃物利用だそうです。井戸水を利用した池は井戸の蛇口からのこぼれ水を水場と石臼を介して池の中に流れるようにし、利用者に水の循環を少しでも感じとってもらうことをねらっているものですが、その工法が本格的です。まずスコップやツルハシなどで穴を掘った後、その内側にビニールシートを貼るのではなく、土を貼る作戦をとりました。立杭や氷上町の知り合いから譲ってもらった良質の土を、一握りずつ池の側面に貼りながら、その土をシコシコと木槌と手で固めていきます。思わず子供の頃の砂場遊びを思い出します。しっかりと固めないと水が漏れる可能性があります。花壇の土は知り合いの造園業関係の方に一声掛けて持ってきてもらいました。花壇のまわりには赤レンガを組み合わせて積むことになり、急遽周辺の更地から赤レンガを１人数個ずつ集めてくるという場面もありました。

昼食には手作りのおにぎり、豚汁、ビールなどで肉体労働の後の食事のおいしさを文字どおり噛みしめました。

公園づくりの材料はみんなそのあたりで調達できるものや知り合いから譲ってもらったものなどあり合わせのものばかりです。しかしかなり贅沢な材料が揃っています。また、参加している人も主婦をはじめ、地域の大工さんや水道屋さん、大学の先生、議員さん、何かとモノ知りなおっちゃん、その他ボランティアの人など総勢20人程度です。こうした主婦を中心とした人材のしなやかなネットワークには目を見張ります。もともと近代社会以前は「まちづくり」や「環境づくり」とは、専門家もいたにせよ地域の人が自分たちのもっている力を少しずつ出し合うものであったことが想像できます。

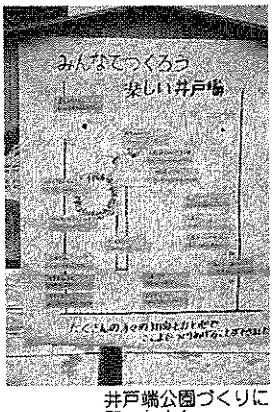
この作業の途中に子供が「何やってんの」と何人か訪れました。最初は見ているだけでしたが、「ちょっと僕にもやらして」と手伝っていく子供もいました。自分のまちで顔見知りのおっちゃんやおばちゃんが汗を流して

池の中の土を固める作業

池の中には水草を入れメダカを放流

いる姿を見るだけでも、子供にとっては珍しく興味のわくことではないかと思われます。

これからのまちや環境にはこうしたことを大人も子供も実践的に体験できる「機会」や「装置」が必要であると改めて感じます。最近、自然の中での子供たちの野外活動などはかなりの程度取り組まれていますが、自分の暮らしているまちで、かつモノづくりなど目に見える形での実践活動はまだ少ないと思います。



井戸端公園づくりに関った人々

さて、公園づくりの方は第２弾として３月17日に仕上げ工事を行いました。この日は池への植栽、水道廻りへの石積み（ケルンのように積む）、それに「思い出貼り」を行いました。「思い出貼り」とは、全壊した建物の跡に残ったコンクリートの基礎に、思い出の品をセメントで貼り付けていくいわば「モザイク」で、震災のことを忘れないように、壊れた湯飲みやの破片や時計、メガネなどが埋め込まれました。

仕上げ工事は実は「とりあえず」のもので、公園は完全に完成しているわけではなく、今後使われていく中で積極的に改良が積み重ねられる予定です。住民によって育まれていく本当の意味での公園になってほしいという主催者の思いが込められています。

（大阪事務所　はらだ　ひろゆき）

ケニア便り　その２

山田　克雄

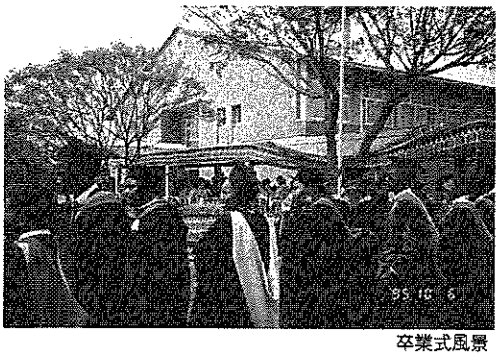
アルパックを一時休職しケニアに赴任してから約半年が過ぎましたが、赴任期間の２年の間のこちらでの様子などを報告できればと考えています。最初に私の住んでいるナイロビ市と勤務先であるジョモケニヤッタ農工大学について紹介させていただきます。

ナイロビ都市圏

ケニアというと、野性動物と草原、あるいはジャングルといったイメージがあります。実際、こちらに来るまでは、ナイロビ市から勤務先である大学までの約35kmの区間を通う道沿いには、ライオンは出ないにせよ、野性動物が見られる自然色豊かな土地をイメージしていました。しかし、ナイロビ市を離れると、近郊住宅地や多様な施設が立地するところがしばらく続き、後は概ね農業や家畜放牧のために利用されている土地が続き、ところどころに家屋が点在します。また、ナイロビ市からかなり離れた場所にもまとまりのある集合住宅があり、このような所に集合住宅がなぜあるのか疑問に思いました。これらの住宅はいわゆる官舎で警察官や軍隊の宿舎として設置されているもの、中には予算がなくなり放置してあるものもあります。

ケニアは、1963年に旧宗主国英国から独立

ジョモケニヤッタ農工大学キャンパス



卒業式風景

建築学部学生の作品展

した共和国として、現在に至っています。人口は1989年の統計では 2,328万人、現在では3千万人ぐらいと推計され、多くの民族と50をこえる部族語があります。公用語は、スワヒリ語と英語となっていますが、初等教育から英語が用いられ、英語が公用の言葉として通常使われています。

首都ナイロビ市の人口は、1989年の推定で約 130万人、現在の都市人口は 200万人を超えると思われます。アフリカを代表する近代都市として高層ビルが集中する中心部（CBD＝Center Business District）と周辺をとりまく地区およびその外周の郊外地という構成になっています。20世紀初頭に英国植民都市として形成された歴史から、英国風の都市形態を特徴としていますが、都市の成立当初から周辺地区は人種および階級による住み分けが明確になっています。一方、増加する都市人口と周辺部の市街化が進み、周辺には多様な居住地が形成されています。

その中にはいわゆる無断居住者（Squatter）が住みつくスラムも広がり、都心部におけるストリートチルドレンとともに、低開発国の貧困を象徴しています。先進国では都市の成長の限界がいわれていますが、このことは都市化が大都市とその周辺だけでなく全国的に都市化してしまった現象としてもとらえることができます。しかし、低開発国では、各地域の都市化を促進する経済成長を伴わないことから、雇用の場（工場等）がないままに都市化は首都周辺にますます特化することになります。ナイロビ市は約 1,700mの高原地にあり、年間を通じた快適な気候と花が絶え間なく咲く美しい都市といえます。しかし、年々多くなる車による大気汚染や都市犯罪の増加など、ナイロビ市の都市問題は基本的な解決のカード（経済成長と雇用創出）がないまま進みつつあります。

ジョモケニヤッタ農工大学

先進国による開発援助の多くは、新しい社会経済基盤の整備に対して投入されていますが、まだ着実な成果をあげるまでには至ってなく、低い生産性と市場経済の立ち遅れ、部族主義による弊害、政府の腐敗、人権問題などの困難な課題が立ちはだかっています。

日本は対ケニアの最大援助国として、多くのプロジェクトと多方面にわたる協力・援助を推進しています。私が勤務しているジョモケニヤッタ農工大学は、1977年に大学設立のプロジェクトが始まり、1982年に開学、1994年には大学法案が公示され、カレッジから学士課程を持つケニアでは5番目の国立の独立大学として法的基盤が整備され、現在に至っています。農学、工学に理学部を加えた3学部からなり、発展途上国の産業振興を担う人材育成を目的とする実学志向の大学としての性格を持っています。

施設、設備は日本の無償資金協力により整

備されたもので、開学以来、プロジェクト技術協力により専門家の派遣、機材供与、研修員受入れ、ローカルコスト負担などの協力が行われてきています。長期専門家は（私もその一員として勤務）専門分野における協力とともに、大学の学科運営に係る多岐にわたる業務を担っています。長いプロジェクトとして続けられてきたことから、ここに至るまで多くの先輩の専門家の苦労と努力が重ねられています。昨年の10月には、卒業式がキャンパス内で行われ、３年課程のデュプロマコースとともに、学士課程の卒業生を送り出しました。

私が所属している建築学科は、１学年が約20名の定員で、現在５年生が一番上のクラスです。課程が６年制であることから来年初めての卒業生を送り出すことになります。私は５年生の設計演習を受け持っていましたが、１年生から設計演習を充実して行っていることから、５年生になるとかなりの設計ができるようになります。なかには、アフリカらしい個性ある設計やよく考えられた設計もみられます。長期の設計課題では、模型や透視図を含めた大作が仕上げられますが、自分の学生時代と同じように、締切り日になると徹夜で頑張って間に合わせることになります。そのほか、学期末になると試験や課題の提出が続き、学生もなかなか大変ですが、現在は学期も終了し、学生は学外実習に入り、キャンパスもひっそりとしています。

新しい学期は、課程の最終学年を迎え、卒業に向けての研究と設計が始まります。今までの５年間の成果が問われる年になります。国の状況は厳しく、社会ではいろいろと困難なことが多い現実がありますが、ケニアの発展を支える新しい力として活躍できる充分な技術と教育を学生が身につけることを願っています。

1996年3月14日

（京都事務所　やまだ　かつお　在ケニア）

きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況

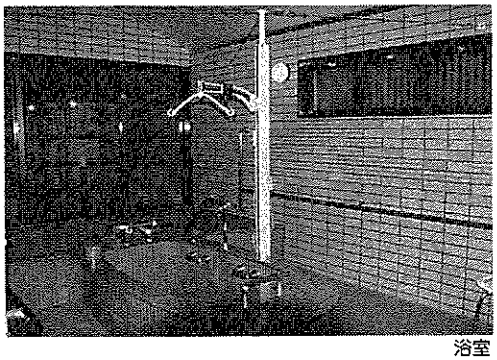
但東町シルク温泉に身障者用浴室ができました

鮒子田　稔理

兵庫県但馬地域の東端に位置する但東町で、シルク温泉及び隣接する宿泊施設やまびこ別館の建設のお手伝いをさせていただいた事は、本誌68号と72号で紹介したとおりですが、この度シルク温泉の横に身障者用の浴室が増築されました。ＪＲ福知山駅から車で40分。八鹿駅からも車で30分。決して交通条件に恵まれているとはいえないこの小さなまちに、思いがけないほどたくさんの人が訪れています。

私達はシルク温泉のお手伝いをしている頃からすべての町民にこの天の恵みを楽しんでもらえるように、家族風呂の提案をしてきました。体が不自由でも、介助があれば利用できるという人がいますが、介助者が奥さんやご主人・息子さんといった異性の場合、これまでの一般浴室に入るには抵抗がありますし、手すりも壁全体には取りつけられていません。そこで、今回漸く体の不自由な方と家族が一緒に楽しめる浴室づくりが着手されました。

およそ25㎡程の浴室には、両側から介助できるスペースを取った小さめの浴槽と、介助者やお孫さんなどが一緒に入れる少し大きめ



浴室

外観

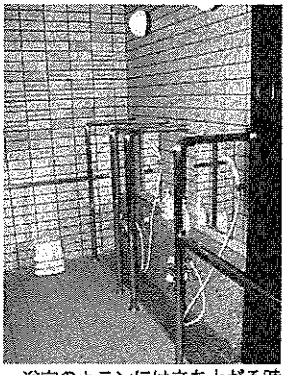
の浴槽を設けました。小さい方の浴槽には、水圧で上下するリフトが取り付けられています。車椅子がなくても手すりを伝っていけば自力で移動できるという人のために、入口から浴槽までと浴槽への入り口、カランのところにもステンレスの手すりを取り付けました。しかしこういった実質的な機能を備えながらも、単に体の汚れを落とすだけでなく、温泉を楽しんで、また明日への活力が湧いてくるようなそんな、小さいけれど楽しい温泉にしたいと考えました。

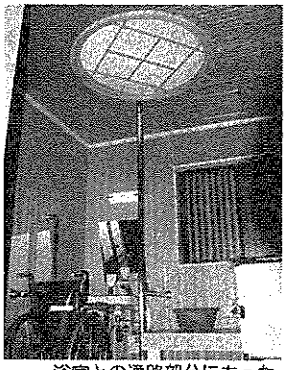
小さい方の浴槽はシルク温泉にちなんで繭(まゆ)の形をしています。框石は一般浴室と同じ赤御影石を使いましたが、複雑な曲線のため現場の方々に随分苦労をかけました。色彩はシルク温泉や、やまびこ別館と同じように但東の土の色を基調としています。小ぶりですが、庭も設らえました。

玄関やロビー、休憩室はこれまでの一般浴室のものと共用とし、浴室は別々でも、お風呂あがりのひとときをシルク温泉を利用する人が一緒に過ごしてもらえるようになっています。

「せまいながらも楽しい我が温泉」といった感じで使っていただければと願っています。

（大阪事務所　ふしだ　みのり）


浴室のカランには立ち上がる時つかまりやすいように両側に手すりを取りつけてある


浴室との通路部分にあった丸いサッシは脱衣室の照明器具として再生した

4年生が学ぶ「働くおじさん」です

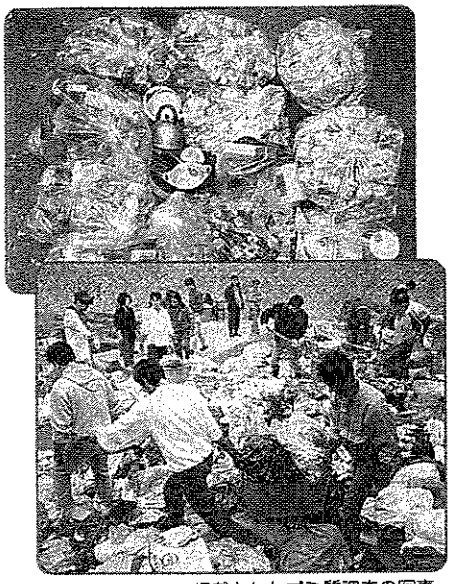
福岡　雅子

新学年の新学期になり、子ども達は真新しい教科書で勉強を始めていることでしょう。今年は、3年に1度の学習指導要領の見直しを経て、教科書の内容も昨年までのものとは少し変わっているそうです。

私は仕事柄、清掃工場に行く機会が多いのですが、そこで見学に訪れる小学校4年生に出会うことがたまにあります。ごみ処理や下水処理、消防、警察などの公益機能は小学校4年生の社会科で習うことになっていて、その一環で見学に来ているのです。

そのような小学校4年生の社会科の教科書の1つに、アルパックのメンバーがごみ質調査をしている写真が掲載されました。写真の説明書きは、「もえるごみとして集められたものの中身――係の人たちは、もえるごみとして集められたものの中身を調べ、これからのごみしょりの計画を立てたり、さらにくふうできることを考えたりするのに役だてようとしています。」とあります。

全体で80ページある教科書上巻の中で、「健康なくらしをささえる――1. くらしとごみ」という節に14ページが割



掲載されたゴミ質調査の写真
出典：「小学社会　4年上」大阪書籍

り当てられていることは驚きでした。しかも、私が毎日の仕事にしている「ごみしょりの計画を立てる」ことを、すでに小学校４年生が学んでいるのです。知らない間に、「ごみ」がこれほどまでに市民権を得ていたことに、改めて時代の流れを感じました。

押し入れの奥から、私が小学校４年生だった時の教科書を引っぱり出してみると、奇しくも同じ出版社。しかし、私の「小学社会４年(上)(下)」のどこを見ても「ごみ」の節はありません。当時は、高度経済成長まっただ中で、教科書の内容も「きょう土をひらく」や「めざましい交通のはったつ」など、開発に関することが中心でした。「きょう土をひらく」は、今の教科書でも下巻に入っていますが、内容は地域発展に尽くした先人の働きを学ぶものです。日本が、産業重視の社会から、環境にも配慮した社会になっていくのが、それぞれの時代の教科書に反映されているようです。

ともあれ、新しい教科書を読んだ子ども達が、ごみ処理の難しさ、ごみを出さないことの大切さを理解してくれ、次世代の環境を築いてくれることを期待したいと思います。

そしてもちろん、「係の人たち」も頑張ります。

（大阪事務所　ふくおか　まさこ）

情報化へ向けて－名古屋事務所での取組みをもとに

伊藤　陽子

今、「情報化」や「インターネット」などの言葉を耳にすることが多いかと思う。

名古屋事務所では、『中部地域における情報化の推進に関する調査研究』（財団法人中部産業活性化センター発行）としてこの３月報告書を作成し、情報化の意味や現状についての調査、提言を行った。また、４月には所内のパソコンとインターネットがつなげられ、情報化（ネットワーク化）への第一歩を踏み出した。

最初私は、コンピュータ同士がネットワークされたり、インターネットから様々な情報を瞬時にして手に入れることも情報化の一つであり、便利ではあろうが、それ自体が面白いものとはどうしても思えなかった。したがって、情報化を進める意義についても、自分の中で消化できなかった。

しかし、前述の報告書を作成する過程で、日常生活の中でインターネットなどのネットワークや情報機器を簡単に楽しく使うことができたら、と思うようになった。それも、家族の通信手段として使えたらいいと思う。

例えば身近なところでは、私たちの親がインターネットを使うことができたらいいだろう。親子間の緊急連絡（事故や病気の場合特に必要）、遠方の親戚や友達とのテレビ電話、病院の予約や紹介、花見や潮干狩りの行楽情

報…。また、子育て中の共働き夫婦が自由にネットワークを使えたら、などなど、夢やアイディアはどんどん湧き出てくる。

それらは全くの絵空事ではなく、現実になりつつある。ここでは、報告書の中で中部地域の取組みとして名古屋事務所が関わった事例から二つ紹介したい。

有松・鳴海絞りをベースとした
フロンティアビジネスの創出

有松・鳴海絞りは名古屋を代表する伝統産業だが、高額な最終製品に対して加工賃が低いこと、職人の高齢化、後継者不足など様々な問題を抱えている。そこで、地元名古屋の工業デザイナーが素材として絞りを取り上げ、個人的につながりを持つミラノのデザイナーに紹介した。このことから、商品案内やデザインなどのやりとりをネットワークを通じて行う計画が立てられ、現在進行中である。

マルチメディア医療情報ネットワーク

病院における療養スペースの確保、個人情報の一元化などの意味から、共同カルテ保管システムの構築が必要である。そこで、ディジタル化されたカルテ（電子カルテ）の実用化に向け、実験事業を行う。この電子カルテに地域医療・福祉関係の情報を入力すれば、さらに使いやすくなるだろう。

これらの事例で共通するのは、「産地－地元デザイナー－ミラノのデザイナー」、「病院－ネットワーク技術者」といった関係がまず先にあり、何をしたいか（コンテンツと言ったりする）が明確なことだ。私はこのことを、「家族」が「楽しく暮らしたい」というふうにレベルダウンして考えることで、理解することができた。

コンピュータがあって、それがつながれているだけでなく、「私」や「あなた」がこうしたい、という思いが無ければ、情報化を進めることに意味は無いと感じている。

＊報告書の詳細については名古屋事務所まで
（名古屋事務所　いとう　ようこ）

◇名古屋事務所のホームページのアドレスは、
http://www.tcp-ip.or.jp/~arpakn/index.html　です。

インターネットに触れてみよう

若林　秀和

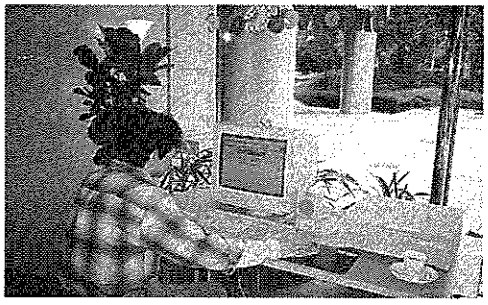
何やら異様な集団

外出先からの帰社途中、ＯＢＰビル群の一角にウィンドーショッピングのようにパソコンが配置され、中高年の人達がマウス片手に立て肘をついて座っている光景を目にした。一体何をやっているのだろうと覗いてみると、壁から「インターネット体験コーナー」なる看板が目に入ってきた。最近の新聞紙上を何かと賑わせているインターネットの体験コーナーである。

よく耳にする「インターネット？」

「インターネット？」。早速、会社に戻り専門書で意味を引いてみると、「共通のプロトコル（通信規約）と共通のアドレス体系を持ち、相互に接続されているネットワークの集合体。」とのことである。

阪神・淡路大震災の復旧時での活躍など記憶に新しいところであるが、その後の普及もめざましく、現在、世界 150カ所以上のネッ



トワークと接続され、利用者は 5,000万人ともいわれている。ホストコンピュータを持たない関係上、利用者の費用負担も少なく、通信の共通言語は英語ではあるものの、日本でも急速に拡大している。

マルチメディアに馴染もう

基礎的な部分は理解したものの、やはり、実際利用してみなければ、その有効性は分からない。このままではマルチメディア時代の流れに取り残されてしまう。ということで、前述の「インターネット体験コーナー」に出向いてみた。ガラス窓の外には、多くの人が行き交っている。少し恥ずかしさもあったが、利用料金1000円（コーヒー付）を支払いパソコンの前に座り、マウス片手に立て肘をつく。

以前、無知のまま一度は触ったことがあるものの、英語やコマンドの多さなどにより“難解”という印象が強かった。

恐る恐る画面に表示されるボタンをクリックする。キーボードは一切使用しなくても良い。「インターネット・エクスプローラー」というソフトを利用し、プロバイダを介してWWWサーバーへアクセスする。アドレスの入力も必要なく、アイコンをクリックするだけで手軽にネットサーフィンがスタートする。

とにかく何だか楽しい

画面上には仮想都市空間が出現し、その都市の中には実在の音楽、映像、芸術、書籍等々の店舗に変わるホームページが並び、検索や購入が可能となっている。巷で評判のＪａｖａによってインタラクティブ通信が可能となりアニメーションなどの動画も楽しめる。また、商用ネット上には様々なフリーウェアやシェアウェアが用意されており、好みのソフトをＦＴＰサイトでダウンロードできる。

その他、数多くのジャンルのメニューが用意されており、マウスでクリックを続けていくと、当初の羞恥心は何処へやらどんどん画面に見入ってしまう。幾度かのフリーズやエラーを繰り返し、英語の解読に四苦八苦したものの、僅か１時間の体験だったが、以前と比較して簡単で「なるほど」の一言である。まだ未体験の方は一度このような場を借りて体験してみると良い。指一本でネットワーク上に自分が乗れる。利用者の急速な増加も納得できるだろう。

国内外を問わず、個人や家庭からの情報の受発信が可能なインターネット。その拡大は今後さらに加速するといわれている。私自身、その前に一つ大きなハードルである語学力の向上が当面の課題となってきそうだ。

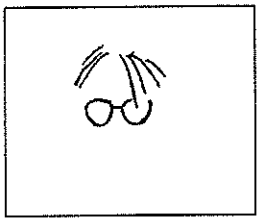
（大阪事務所　わかばやし　ひでかず）

‘96年新人紹介

今年もアルパックに新人が入社しました。今後とも皆さんどうぞよろしくお願いします。（□内は、新人同士がお互いのイメージをビジュアル化しました）

◆京都事務所

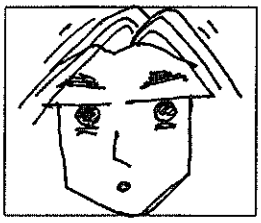
廣部　出



最近、道を歩いて汚い、うるさい、臭い、ごちゃごちゃしている、危ないetc.ネガティヴな印象を多く受けます。ポジティヴなところでは、サクラのつぼみの膨らみや、モクレンの潔さに季節を感じたり、川の中にナマズを見つけたり、綺麗なヒトを見つけたりしてはほくそえんでいる京都人です。忙中閑あり、この閑を活かせるバイタリティを持っていたいと思っています。

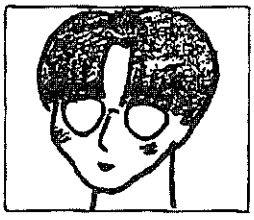
◆大阪事務所

森岡　武



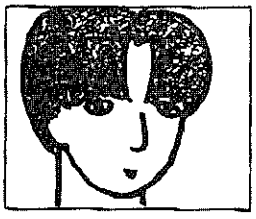
よく吉本の芸人さんと出会う大阪の東三国（淀川区）出身です。中学から大学まで水泳に熱中していました。今まで読んで印象深かった本は、「マニエリスムと近代建築」で、建築の見方が変わりました。これからは、全てが勉強だと思って、貪欲に何事にも頑張っていきたいと思っています。

福岡　敏成



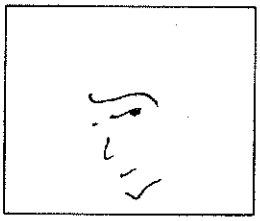
18年間福井で生まれ育ち、大学生活は古い街並みを残し、情緒豊かな美しいまちである金沢で送りました。大阪を歩いて感じることは、タコ焼き屋が多いことと立ち食いの串カツ屋があることです。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩が好きで、本当に「デクノボー」になれたらよいと思っています。

高田　剛司



生まれ故郷は、東京圏の北の玄関口である「大宮市」。他人に負けないことは行動力（俗にずうずうしさと言うこともあるらしいで、今まで一番熱中したことは、バトミントンです（マイナーですが、奥が深くてついついハマル）。これから都市計画・地域計画に関わるいろいろな仕事がしたいです。

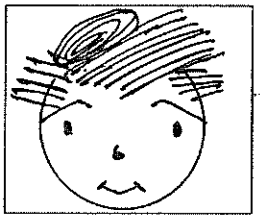
武田　宏



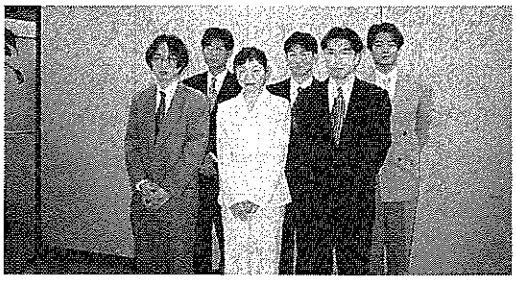
ふるさとの山口はおっとりした人間、晴れやかな気候、リラックスができることが自慢です。他人に負けないことは、小金を持っているときの無駄づかいと雑誌を買う量です（月に80冊買うときもある）。また、Macintoshには、めちゃくちゃ詳しいと自負していますが、残念ながら大阪事務所では役に立ちません。これからは、いろんな仕事に関わり、レポートを見て良い意味で「これは武田が書いたんだろう？」と言われるようになりたい。

◆名古屋事務所

福岡　真由美



最近、感じることは、朝：「わぁ、遅刻するぅ～」、夕：「今日もお疲れ様」ということ。家の近くには、一度食べたらやめられないソフトクリームがある愛知牧場があります。入社後は、一人でも多くの人が喜んでくれるような仕事がしてみたいです。



左から、廣部、福岡(敏)、福岡(真)、高田、武田、森岡

編集局よりお願い

新年度を迎え、読者の方々で住所・所属先など変更事項がございましたら編集局までご一報をお願いします。

新刊旧刊書評紹介

スティーヴ・マルティニ著　　集英社文庫

『依頼なき弁護（上・下）』

紹介　松尾　高志

世間では昨年頃から「裁判」が人々の注目を集めているようです。オウム事件やO.J.シンプソン事件の裁判報道が連日テレビを賑わしたためか、裁判ドラマがテレビで放映されたり、司法制度についての教養講座まででできたそうで、まあ今まで余り身近でなかった日本の司法制度について考える良い機会なのかなという気もします。

さて、海外ミステリーの世界でも、90年代に入ってからアメリカで「リーガル・サスペンス」と呼ばれる法廷・法律小説が新たなブームとなり、日本でも最近数多く紹介されてきています。このブームの特徴としては、作者が法曹界出身（現役弁護士、元検事、等）であったり、タイトルに漢字４字の法廷用語（有罪立証、物的証拠、等）を用いた作品が多いこと等があげられます。これは、元敏腕検事補で現役弁護士という肩書を持つスコット・トゥローという新人作家の「推定無罪」（ハリソン・フォード主演で映画化されたのでご存じの方も多いと思います）という作品が1987年に出版されて大ベストセラーになったことでこのブームを大きく盛り上げたためと思われます。このトゥローという人、実力には定評があり、日本のミステリーファンの間でも評価は高く、その後発表された作品を含め、何れも年間ベストテンの上位にランクされるという、このジャンルでは安心マークでお薦めできる作者なのですが、今回は敢えて別の作家をご紹介することにします。

さて今回取り上げるマルティニという作家、元弁護士で検事も務めたことがあるという経歴といい、前作のタイトルが「情況証拠」、「重要証人」という四字熟語であることといい、まるでブームの典型のような人で、いかにも二匹目のドジョウ狙いのように見えたせいか、前作まではミステリーファンの間でも余り話題にならなかった作家でした。しかしこの前２作、刑事弁護士を主人公にしたシリーズなのですが、読んでみるとなかなか面白いのです。トゥローの作品が、リーガル・サスペンスと言いながら、法廷場面そのものよりも、法廷に関わる人間達の夫婦関係や家族関係を通した人間ドラマを描くことで高い評価を得ているのに対し、マルティニの面白さはひねったプロットの冴えとスピーディなサスペンスの盛り上げの巧さで、特にストーリーの大部分を占める法廷場面の緊迫感は際立っており、陪審員を前にした弁護側と検察側の打々発止の論戦と駆け引きを目の当たりにしているようで抜群の面白さです。

１月に出版されたばかりの表題作は同一主人公のシリーズ第３作ですが、今回はあちこちの書評等にも取り上げられて評判もなかなかのようで、年間ベストテン入りも期待できそうな作品となっています。勿論独立して読める話ですが、シリーズ前作も読んで頂きますとますます面白いこと間違いなし。ついでにアメリカの司法システムと刑事訴訟手続がよく判るというおまけ付きです。

（京都事務所　まつお　たかし）

まちかど

ブレードランナーのまち現る

中塚　一

大阪環状線のホームに立つと「おや？」と思う風景に出会った。建物の中・外をジェットコースターが飛び交う、まさにＳＦ映画のブレードランナーさながらの風景です。

ここは、ＪＲ新今宮駅前、通天閣で有名な新世界の南側で工事中のフェスティバルゲートの現場。現在、霞町バス操車場用地を土地信託事業を活用し、都心型アミューズメント施設等が建設中です。

写真３が、明治時代の新世界周辺ですが、初代通天閣（現在のものは２代目、ちなみに現在ネオンなどは改修中）の周辺にも、ルナパークという当時の最先端の遊園地が整備され、真っ赤なロープウェイが華々しく写ってます。現在、私が感じたのと同じように、当時の人々にとっては、未来都市的な風景に写っていたのではないでしょうか。

明治45年に開園したルナパークは、約15年間でマンネリズムのため解体されました。敷地が限られている新たな都心型アミューズメント施設が、ルナパークの再現にならないで東京ディズニーランドのように変化しつづけることが出来るでしょうか。

（大阪事務所　なかつか　はじめ）

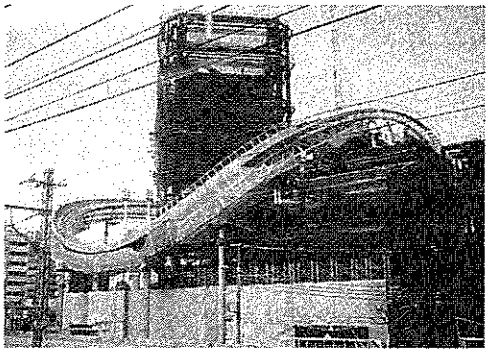


写真１：建物の中・外を飛び交うジェットコースター

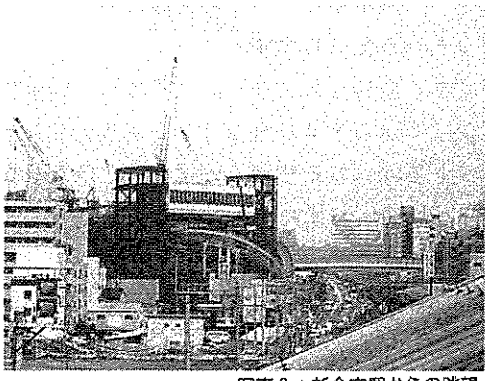


写真２：新今宮駅からの眺望

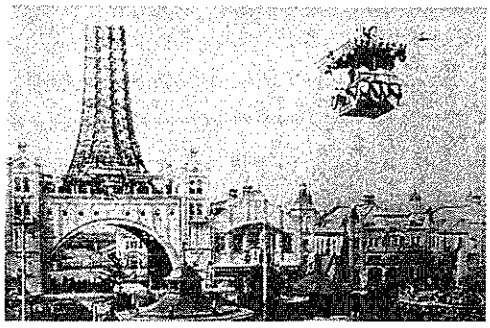


写真３：明治時代の新世界周辺
出典：「大阪盛り場図鑑」創元社

アルパック（株）地域計画建築研究所

- 本　　社
- 京都事務所 〒600京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F／TEL(075) 221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F／TEL(06) 942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460名古屋市中区丸の内3-18-30・ツボウチビル2F／TEL(052)962-1224 FAX(052)962-1225
- 東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401／TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- ㈱九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-1・日之出ビル6F／TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673